

⑨守る

静かな自然が残るびん沼とその周辺。しかし、宅地化の波は近くまで進み、また訪れる釣り人にはマナーの悪い人もいる。そのため、びん沼の環境を守ろうと努力する人たちがいる。その代表が、富士見市のNPOゆめつるせの小杉武代表だ。びん沼の清掃活動を行う他、市民活動家などをグループ化し、毎年「びん沼川環境まつり」を開いている。

インタビュー

自力で工務店立ち上げる

びん沼クリーン運動、地元中学校における木造建築体験学習、薬物乱用対策講演会、防災・交通安全フェスタ、そして空き家の有効活用。

次から次へと活動を繰り広げるNPO法人ゆめつるせ（富士見市）。小杉武代表を社会奉仕にかきたてるのは、那須の貧乏な家に生まれ、山菜売りなどで家を助けた子ども時代の記憶、という。

誰かに仕事を作ってもらうのはいや。

—ご出身は。
小杉 栃木県那須町です。集落が30軒ほど。那須高原まで車で30〜40分のところ
です。

—家業は。
小杉 貧乏な農家でした。8人兄弟の2番目でしたので、小学校4、5年から、山へ入って山菜を取り、それを町に売りに行った。子どもも自転車がないので親の自転車を「三角乗り」で三角のところに足を入れて乗るんです。

水路という路ですが、ワラで束にして一軒一軒売っ

貧乏に育ったことはうれしい

NPO法人ゆめつるせ
小杉 武 代表理事
(小杉工務店社長)

て回る。5〜6把で30円とか50円ぐらいで売れるんです。それで味噌煮の缶詰を買って10人で食べた。家が貧しいために、そうせざるを

得なかつたんです。修学旅行はやはり行けなかつた。農業の仕事を手伝

い、煮炊きは全部薪でしたから、薪を集め山から樫に載せて下ろしたり。そういうことやつて家を助けた。—就職はどこで。
小杉 中学卒業まで那須にいて、集団就職で汽車に乗って東京に出て、土木関係の仕事に就いた。当時は給料なしでした。20歳くらいまでいたかな。それから埼玉に来て、22歳で今の小杉に居候したわけです。小杉



全部覚えるのは大変なことですよ。親方はいないし、誰も教えてくれない。手伝いに行き、建て舞いがあると夜遅く足場の上まで上がって、屋根の難しいところをマッチで火を点けて見て、わからないところは都内の書店まで行って調べた。すべて自分で盗むようにして覚えた。大体4年かかりました。それで自信つけたんです。

は家内の姓なんです。—それから建築の仕事を始めました。
小杉 24で個人で工務店を立ち上げました。大工の「ダ」の字も知らなかつたんですが、生きていかなければならない。

1軒の家を（作るのを）

—その後会社を設立する。
小杉 悔しい思いをさんざんしてきましてから、いつまでも人に使われているのはいやだという思いが浮かんできて、35で有限会社になりました。鶴瀬の駅近くに、8畳くらいの掘っ立て小屋を建てて始めました。3年くらい仕事は何もなかつたです。お金入ってこないからかみさんも泣いていました。大きな建設会社の下請けから入るといのが一般的なんです。誰かに仕事を作ってもらわなければならない。誰かに仕事を作ってもらわなければならない。誰かに仕事を作ってもらわなければならない。誰かに仕事を作ってもらわなければならない。

ぼた餅みたいに誰かが仕事

やるからといってもらうのは極力やらなかった。やるなら最初からやりたい。ペニヤ1枚、釘1本の仕事でもいいから、自分で直接お客さんから仕事をもらいたいという執念でした。

当初から私は飛び込み営業です。三芳町にある会社に月に1回顔出しに通って、3年たつて、やっと「コンクリートの駐車場を作ってくれないか」と言われた。リース屋からパワーシャベル借りてきて、自分で作った。それが最初の大きな仕事でした。これは一生懸命あきらめないでやると仕事を頼んでくれるんだということを感じました。三年過ぎてから、親の顔もありましたが、ポツン、ポツンと仕事が入るようになりました。

貧しい家に育ったということはいけません。修学旅行もいけずくやしいですから、社会に出たら一生懸命働きたいんですよ。お金もただけですし、喜

ばれるし。

雲をつかむようなことをやりたい

— 独立心が強いんですね。

小杉 誰かに根回ししてどここへ行くというやり方は嫌いな性格ですから。ともかく雲でもつかむようなことをやりたい。常々子ども

のころからそんな風だったんです。いい話は信用しないし、

子どものころ家を助けた記憶から人助けに乗り出す

自分の手の届く範囲のものではないとやらない。だから人からだまされることもない。有限会社始めた当時はひっかかったこともあったけどね。

— その後も事業は順調に。

小杉 当時は今と比べれば景気もよかつたんでしょう。ですから仕事に困らなかつた。47歳で株式会社。

6年ぐらい前に、社屋のビルとマンション2棟を自力で建設しました。今は木造住宅建築が中心で。重量鉄骨や、7、8階建てのマンションもできる体制です。

その他、不動産（土地の売買、アパート・マンション管理、分譲住宅の販売）も。

— これまでを振り返ってどうですか。

小杉 日頃いろんな面でチャレンジしてきたのでチャン

スも訪れたんでしょう。常々チャレンジしていれば回りの人たちもついてきてくれると思うんですよ。

それと、3年、5年と、きちつと目標を持つことで

すね。これをやりたいんだと。私は職人さんから、いずれは経営者になりたいという願望がありました。すると目標通りにいくんですよ、不思議と。

— ボランティア活動を始めたきっかけは。

小杉 平成12年のころ、富士見市健康増進センターの隣を流れる富士見江川に桜の苗木を植えたいと、市の方に提案したんですが、河



川法とかの制約あり、断念したんです。

平成16年に、富士見市の障害者の施設「ゆいの里」に、桜の苗木をプレゼントしました。最初ボールペンくらいの太さを畑に植えておいて5、6年たったも

びん沼クリーン作戦

のを、パワーシャベルとダンプ出して、1日がかりで植えた。もう咲くでしょう。— それがNPO活動に発展した。

小杉 それからぐいぐいとNPOの方に入ってきた。16年に最初個人で「ゆめつるせ」という団体を立ち上げて、19年にNPO法人に。

— 学校の支援活動に力を入れてる。

小杉 自宅の近くに富士見台中学校があります。保護者会の時大根を寄付したりしていたんですが、学校側からバスケットコート支柱が腐り土の中に塊が残っており、何とかしてほしいと。それならパワーシャベルを使えば簡単にとれるが教育にならないから、子どもたちにスコップ持たせて掘らせたらと指導したんです。校長先生、生徒からも感謝状をいただきました。18、19年には、木造建築の体験学習もお手伝いした。

学校の先生は、私たちの世代にとっては雲の上の存在でした。今、学校も、予

算が少なく大変な思いをしている。困っていることなら、お願いされたことは断らないで気持ちよく、やっ
てあげるといふこと。やはり人助けをしたいといふこと
とです。

―「びん沼クリーン作戦」
はどういうことから。

小杉 私も那須で育ち、川で魚を採ったりという思い出を引つ張ってきています。びん沼は地元ですが、実際に川岸を歩いてみたら、あまりにひどい。ごみはあるし、釣り人は自分の周りにごみが浮いていても片付けようとしません。これは大変なことになるなど。びん沼の水は荒川と合流し、我々は荒川の水を飲んでるわけです。

平成17年でしようか、埼玉県の方に足を運んで、「びん沼をきれいにしたいから何か指示を出してください」と。モデル事業の水辺の里親制度を紹介された。それから年3回、清掃をしています。ごみがすごいですよ。
―NPOの活動はどんな分野。

小杉 町づくり、環境、青少年育成が3つの柱です。青少年育成では薬物問題、町づくりでは防災防犯も力を入れていきます。やらなければならぬことは山ほどありますよ。

空き家の活用で安価な住宅を提供

―これから取り組んでいこうとされているのは。

小杉 県とNPOとの協働事業として、今年2月には、

行政の助成は受けない

空き家の有効活用について提案しました。

今大騒ぎになっていますが、リストラされ、寮からも追い出され、寝るところもない人たちがいる。住まいがないと就職もできない。その中には20代、30代の人も多い。若い人は可能性はいっぱいある。将来社長になるかもしれない。そういう人を応援したい。―具体的にどのようによすねば。

るが、不動産会社は、マンネリになっていて、値段のいい物件は優先的に扱うけど、古いアパートは商売にならないから手をつけにくい。こういうアパートがあるから、困っている人にあっせんしたいというしくみを作らないと。具体的には家賃負担など県の方の手続き上のことも出てきます。地主さんは固定資産税を安くしてもらおうとか。それと、一戸建てでも、

―次々と新しいアイデアが。
小杉 マンネリで同じことをやっているのではだめです。経済は変わってあり、変わっている状態に合ったようにしていかないと。

―NPO活動を続けるのは大変ですね。

小杉 NPO法人は実際経費がかかります。ほとんど私が負担しています。従業員も一人がつきっきりになっていますから。

―行政の助成を受けるという手もあります。

小杉 しかし富士見市も赤字です。赤字のところに、ボランティアするのでお金くださいというのは理解できません。いくら税金にしても。人を助けたい、ボランティアをしたいなら、事業資金は自分たちで考えなさいよと。

―お金のない人はできませんね。

小杉 だったらやらない方がいいんです。人の金ですから。自分の力でやるならいいんですよ。そうでないと社会がなまけものになってしまう。教育のためにも

よくないです。根本的発想がそこ。
―そこまで犠牲を払って活動するのはどうしてでしょうね。

小杉 こうしたことを始めたのも、やはり子どもころ家を助けたという記憶が生きているのかもしれない。自分で自発的になるから。誰からも指示されたわけでもない。

でも、社会に奉仕することとは悪いことではないです。自己満足ではないですよ。釣りとかパチンコは自己満足で、私はそういうことは嫌いです。そういうお金の使い方は納得いかない。どうせお金を使うなら、死ぬときに水いっぱいになって戻ってくればいいかなと。のらりくらり生きていくより、そっちの方やった方がいいでしょ。そう思いませんか。もちろんいろんな生き方があっていいと思いますが。

（本記事は「東上沼物語」2009年5・6月号に掲載されました）。

NPOゆめつるせの小杉代表は、びん沼の清掃から始まり、地域の社会貢献活動を広げていった。2010年には「新河岸川広域景観づくり連絡会」代表に就く。これは埼玉県が進める「新河岸川広域景観プロジェクト」の推進組織。小杉氏はこの連絡会を主導し、サイクリングマップの作成、カヤック体験などの事業を実施、さらに11年からは「びん沼川環境まつり」を開いている。

びん沼川環境まつりは、びん沼の環境保全を目的に、住民や釣り人の意識を高めようとするイベント。会場は富士見市のびん沼自然公園。様々な趣向を凝らし、これまで11、12、13年と3回実施している。

13年は11月16日に開かれ、恒例のゴミ拾いの他、自転車安全教室、煙体

「新河岸川広域景観づくり連絡会」から びん沼川環境まつりへ

験・消化訓練、演奏（消防音楽隊、小学校鼓笛隊、金次郎バンド）のど自慢大会などが催された。

なお、びん沼川環境まつりは、11年、12年は新河岸川広域景観づくり連絡会が主催したが、13年はNPOゆめつるせが主催者になっている。



新河岸川カヤック体験（2012年）



びん沼環境まつり（2011年）



びん沼川環境まつり（2012年）



小杉代表（2012年）



びん沼川環境まつり（2013年）